

中高接続の推進

6年間で効果的に育成、 教師が足並みをそろえ、 生徒の学力と進路意識を

変革のステップ

背景と課題

- 中高一貫校のメリットを生かし、6年間を見通した指導で学力の向上と高い志の育成を両立させることを目指す

実践内容

- **学校生活の成果を可視化** 「あしあとカード」で学校生活における生徒の多様な活動をポートフォリオとして蓄積
- **補習・課外の工夫** 土曜補習の対象集団ごとの目的をはっきりさせ、夏期課外は対象学年を中等部3年生と高校3年生に限定する工夫をした
- **「高い志」の育成** 夏期課外の仕組みを工夫し、夏季休業中に体験活動に充てる時間を確保。進路資料室を整理し、生徒の目を進路情報に向けさせる

成果と展望

- 志望校選択や志望校の過去問題に取り組む時期が早まるなど、進路に対する生徒の意識が高まった
- 中等部においても、模試が活用され始め、データを用いた指導の質が向上している

PROFILE



静岡県立浜松第二中学校（旧制）として開校。校訓として「高い知性（知）・豊かな心（仁）・たくましい力（勇）」を掲げ、国際社会におけるリーダーを育成するための教育活動に取り組んでいる。2002年に中等部を設置し併設型中高一貫校となった。

設立	1924（大正13）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約240人（高校）

2016年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、首都大学東京、静岡県立大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ573人が合格。

住所	〒432-8038 静岡県浜松市中区西伊場町3-1
電話	053-454-4471

Web site <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/hamamatsunishi-h/home.nsf/>

学校全体で課題を洗い出し 改革の方向性を確認

静岡県立浜松西高校・中等部では、全校を挙げて学校改革に取り組んでいる。そのきっかけは、中等部10期生が高校に入学した2014年に、管理職や分掌の課長、学年主任からなる運営委員会で、中高一貫校としての取り組みを振り返り、今後同校が進むべき方向性を検討し始めたことだ。議論の末、次の3つの課題が浮かび上がった。

1つめは、中高接続の推進だ。中等部の設置当初は中高の教師の乗り入れ授業などにより、教師間の交流が活発に行われていたが、持ち授業時数の関係などにより、近年は縮小傾向に

*プロフィールは2017年3月時点のものです

あった。また、指導ノウハウなども共有する必要があったと、中等部1年生から持ち上がり、16年度高校3年生を担当する進路課の田開洋史^{たひらひろあき}先生は振り返る。

「当時、高校籍の教師として、中等部が重視する生徒指導や人間形成の取り組みを理解し、高校の指導で引き継いでいきたいと感じていました。一方、中等部においても、学習習慣の定着や模試の活用など、高校進学後にも生きる指導を意識的に進めたいという思いがありました。6年間にわたる系統的な指導を模索していくには、中高の教師が互いに歩み寄る必要があると感じています」

2つめは、学力差の解消だ。同校は中等部へ



静岡県立浜松西高校・中等部
河西伸之 かわにし のぶゆき

教職歴24年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「『己、未だ救われざるに人を助けんと一念発起す』の思いで務めています」



静岡県立浜松西高校・中等部
西脇 洋 にしわき ひろし

教職歴21年。同校に赴任して15年目。進路課。「『分かる』を『できる・使える』に。悔いのない進路選択ができるよう支援を続けたい」



静岡県立浜松西高校・中等部
田開洋史 たひらき よし

教職歴19年。同校に赴任して6年目。進路課。「生徒一人ひとりが最高の進路選択ができるように、今できることに手間を惜しまない」



静岡県立浜松西高校・中等部
松下貴晴 まつした たかひろ

教職歴15年。同校に赴任して4年目。中等部進路課長。「教科でも進路でも生徒の視野や可能性が広がる支援を心がけたい」

適性検査を経て入学するものの、入学後に学力差が広がる傾向にあった。数学と英語は中等部3年生以降、習熟度別クラスを設けて対応しているが、中等部からの内部進学者には、学力不振に悩む生徒もいた。

3つめは、教育目標に掲げる「高い志」を生徒に育むための進路指導の追究だ。進路指導主事の河西伸之^{かわにし}先生は次のように語る。

「高い志を抱くことは、学力を伸ばす原動力になります。進路意識の醸成と学力向上をもとに重視するという方針を改めて打ち出し、それに沿って教育活動を見直していききたいと考えました」

生徒の成長過程を可視化し 生徒自身に気づきを促す

1つめの課題「中高接続の推進」については、生徒の学力を継続して測れる体制の整備を進めている。例えば、同校では中等部生の学力を測る尺度として、中高一貫校を対象としたベネッセの「学力推移調査」(*1)を実施してきた。しかし、春と冬の回は全員実施だったものの、10月実施回は希望参加であったり、学力推移モニターしにくい状況が生まれていた。そこで、10月実施回への全員参加について、中等部の合意形成を2年間かけて達成した。また、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」が始まる20年度に向けた対策として、生徒の思考力・判断力・表現力の測定に特化したベネッセの「中

学総合学力調査」(*2)も、15年度入学生から受験している。さらに、教師の目線を合わせるために、6年間に行う模試の一覧表を作成し、一つひとつの模試のねらいも明記している。

「中等部でも、全国を意識して生徒の学力を把握する文化を育みたいという思いがありました」(河西先生)

6年間における生徒の成長の軌跡を、生徒と教師が共有するためには、「あしあとカード」(P.34図1)を活用する。「あしあとカード」は、学習や読書、部活動にいかに取り組んだかなどを生徒自身が記録するツールで、担任が回収・点検する。中等部版と高校版の2種類がある。

中等部版では、名言の暗唱、各種検定資格の取得状況、ボランティア活動への参加実績など、多彩な活動を記録する欄を設けている。

「『中等部発足当時の先生方がつくった教養主義的な活動を風化させてはならない』という思いから、私が中等部進路課長だった7年前に『あしあとカード』を作成しました。本校中等部ならではの各活動の成果を、一元的に記録することが目的でした」(河西先生)

高校版では、志望大学・学部、個人面談での内容、気になる大学のオープンキャンパスの訪問記録など、進路に関する欄を多く設けている。また、高校では、「あしあとカード」を保管するクリアファイル¹を16年度から一括購入し、「あしあとファイル」と呼ぶことにした。模試の成績帳票、各種講演会やオープンキャンパスの感

*1 中高一貫校の中学校向けアクセスメント。

*2 「教科の思考力・判断力・表現力」を測定し、段階別評価を行うテスト。国語・数学・英語に加え、合教科型のテストも含まれる。

想文などを一緒にファイリングするように指導している。16年度高校1年生を担当した進路課の西脇洋先生は、次のように話す。

「中部部から入学した高校1年生は『あしあとカード』も4年目。自分の取り組みや学びが蓄積されていくファイルですから、それを見返すことで、生徒は自分の志向や適性がよく分かります。そのため、志望理由書や小論文の作成にも取り組みやすくなるでしょう。また、担任としては、ファイルをチェックすることで、生徒一人ひとりの状況が把握でき、理解が深まると実感しています」

基礎固めを徹底し、生徒全員の学習意欲を高める

2つめの課題「学力差の解消」については、成績層別の指導を推進した。まず、土曜補習「サタデークラブ」の目的を成績層別にはっきりさせた。成績上位層向けの講座では、数学・英語の発展的な内容を学ぶ。その一方で、国語・数学・英語の基礎的な内容の講座を設け、授業の復習や定期考査対策を、時には生徒を指名して実施し、生徒の学習意欲を引き出すように心がける。

「生徒が『分からなかったところ』が分かるようになった」と、自分の成長を実感できるように段階的に指導しています。また、生徒には学習や補習の重要性、自分のために学ぶという姿勢が必要であることを繰り返し伝えていきます」（西脇先生）

「あしあとカード」(例)

図1

中等部版

教養主義的な活動を重視するため、読書や名言の暗唱、ボランティア活動など、学習に関すること以外にも様々な内容を書く。

高校版

読書や部活動の取り組みなどに加え、進路に関する欄を充実させている。志望大学・学部・学科名や、大学で学びたい内容などのほか、面談から得られた気づきなどを書くように指導している。

* 同校の資料を一部抜粋して掲載

また、夏期課外の仕組みも改めた。従来は高全6学年で進路課主催の夏期課外を行っていたが、対象学年を絞って中等部3年生と高校3年生だけにした。その理由は、高校3年生への指導を充実させるためだ。

「先生方の所属学年を問わずに高校3年生の指導をお願いできるようになれば、課外をさらに手厚くできます。少人数制指導などに

より、生徒個々の課題に応じて手を差し伸べ、大学入試に向けてしっかり基礎を固めさせたという思いがありました」（河西先生）

友人の頑張りから刺激を受け、互いに高め合う生徒たち

夏期課外の工夫は、学校改革の端緒になった3つめの課題「高い志の育成」についても効果

を表している。夏期課外の対象者を限定することで、下級生に時間的な余裕をつくり、進路意識に影響するような特別活動に取り組みやすくさせたいと考えた。

そのため進路課では、夏季休業中の体験活動に関する情報を生徒に向けて盛んに発信したほか、進路室前の掲示板を整備し、オープンキャンパスのチラシや体験活動のパンフレットを生徒の目につきやすいように配置した。その結果、大学のオープンキャンパスには、高校2年生までに約8割の生徒が参加するようになった。

15年度に始まった「西山台チャレンジサポート事業」も追い風になっている。同事業は、生徒が未知の体験を通して、主体的な判断力や行動力を身につけられるように、長期休業中の特別活動を支援。事後報告書の作成を条件に、特別活動の補助金を申請者1人につき5000円を上限として支給する。生徒が参加する活動は、中高生対象の校外の教養講座や体験活動、NPO主催のボランティア活動、短期海外留学など多彩だ。この事業の影響もあり、16年度の中等部1・2年生は、補助金の有無にかかわらず6割以上がボランティア活動や何らかの体験活動に取り組んだ。中等部進路課長の松下貴晴先生は、次のように話す。

「補助金を受けた生徒が書く報告書は進路通信に掲載して、体験をできるだけ広く共有できるようにしています。友人の頑張り刺激を受け、『来年は自分も参加したい』と意

欲を燃やす生徒が目立ちます。中には、自分で情報を収集し、我々も知らないイベントに参加する生徒もいます」

進路情報の提供の面でも、「高い志の育成」につながるように工夫を凝らしている。例えば、どの生徒も進路資料室を利用しやすくするように、資料の配置を大幅に見直した。進路資料室の奥にあった職業調べのための書籍群は、進路室前の廊下に設置した本棚に移し、有効に活用できずにいた大学の定期刊行物や広報誌も表紙を前にして進路室前に新設した本棚に並べ、生徒の目につきやすくした。進路資料室内にも本棚を増設し、入試過去問題集を国公立大学はほぼすべて、私立大学も網羅的にそろえ、現在では直近6年間に販売された入試過去問題集が手に取れる状態をつくった。入試過去問題集の所蔵数は以前の2倍以上になっている。

「生徒に進路資料室への来室を奨励しましたが、なかなかこちらに足が向きませんでしたが、なかなかこちらに足が向きませんでしたが、そこで、『生徒が来ないのなら資料を生徒に近づけよう』と発想を切り替え、廊下のデッドスペースを有効活用することにしたのです。今後は自習スペースも拡張し、生徒がより身近に進路資料室を活用できるようにしていきたいと考えています」(河西先生)

生徒一人ひとりに応じた きめ細かな進路指導を追究

6年間を見据え、教科学力から体験活動に及

ぶ幅広い改革に取り組んだ成果は、様々なところに表れている。例えば、高校では以前よりも早い時期に志望校を意識する生徒が増え、過去問題にも早くから取り組む姿が見られるようになった。前述した通り、中等部を中心に夏季休業中の特別活動への参加が活発化していることが、高校での主体的な進路選択に結びついている可能性がある。また、教師は模試のデータや「あしあとカード」を通して生徒の変化にも気づきやすくなり、指導にも生かされるようになった。中高における生徒の情報共有も進んでいる。例えば、中等部3年生は高校3年生担当教師による高校入学前面談を2月に受けるのだが、その面談資料として「あしあとカード」は有効活用されている。また、高校1年生の「あしあとファイル」には、中等部時代に書き込んだ「あしあとカード」を見つかることもできる。

一方、課題は中高の教師がさらに連携を深め、6年一貫教育の系統性を高めていくことにあると田開先生は考えている。

「どのような生徒を育てていくのか、中高の教師が連携をさらに密にして、方向性をしっかり共有していきたいですね。特に、生徒と向き合っている私たちとしては、学年団でアイデアを共有し、必要な手間を惜しまずに

かけてあげて、生徒一人ひとりが将来と真剣に向き合い、自分に最も合った進路を選択できるように、指導改善を重ねていきたいと考えています」